

〈不安〉が切りひらいた地平と障壁
—— 日本民俗学にとって現代とは —— (2)

The Horizon and Limitations of the “Anxiety”-Theory
a comment on current Folklore Studies in Japan (2)

河野 眞

KONO Shin

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: takakons@vega.aichi-u.ac.jp

Abstract

The present paper, continuing from the previous issue, deals with the problems concerning “current folklore studies”, especially the theoretical succession from Kunio YANAGIDA (1875–1962), the founder the Japanese folklore studies to his successor Noboru MIYATA (1936–2000). The former emphasized “anxiety” as a psychological criterion of the people living in the town because they were far from the province and its life style. The latter, Miyata, has also basically considered many phases of town life from the later period of the Edo era to today from essentially the same angle. In this paper the problems of such viewpoints will be pointed out and critically analyzed.

4. 柳田國男における都市・農村論

柳田國男は農漁村の古習を飽くことなく収集し解明したことによって測り知れないほどの恩沢を後世に垂れたが、決して古習に拘泥していたわけではなかった。社会の変化や、それを担う人間の行動、殊に新たな仕組みへの移行を必然的かつ肯定的に理解していた。しかしそこにはまた限界もあった。その事情を、たとえば「現代科学といふこと」（昭和22年）に読むことができる。そこでは民俗学が対象とするような〈言はず語らずに日本式なる約束といふもの〉に柳田國男が節度のようなものを考えていたことがうかがえる¹。

1 「現代科学といふこと」（昭和22年）『定本 柳田國男集』第31巻 p.3–16

それが果たしてよいか悪いか。又は今後も続けるか中止するか、それを決定するのは諸君であるが、それはともかくも事実を知ってからでなくてはならぬ。たとへば夏が過ぎ秋風が僅かに吹き始めると、家の内外を掃き清めて、どの家でも盆の魂祭をする。つまらぬことだからもう止めようとなると、先ず其為には何の故に、又はいつの昔から之をしてをるかを知ってかからねば、さうですかといふ者は恐らく無いであらう。斯ういふものこそ中央の政治機関の変遷やその権力の所在移動などよりも以上に、全日本人に取って、抜きさしのならぬ歴史であるのに、それがまだちつとも知られてゐなかつたのだ……

政治的な事件や権力者のめぼしい事蹟よりも、日本人の暮らしに走る決まりや脈絡の方が深いところで大問題であるとの自論であるが、具体的にはどのようなものが考えられていたであらうか。

さういふやゝ珍しいこの国限りの事実を、少なくとも若い人々乃至は都会のうかゝした生活を続けて居る人々に心づかせ、全体どういふわけでさうであるのかと、たとへば物を覚え始めの小児のやうに、訝り不思議がり又年長者に向かつて尋ね問ふやうな気質を、養つて見たいのである。世の中が多忙になつてから、この物をいぶかる気風は、一旦有つたものまでがひどく衰微して居る。勿論五つ六つの子供のよにやたらに、「何で」や「どうして」と連発はしなかつたらうが、元は若い人々は心に不審を抱くと、いつも年をとつた人の会話を気を付けて聴いてゐたのである。男も女も成長して行く頃の好奇心は、今でも田舎の方がずつと盛んである。ちよつとでも何か変つたことが村に入つて来ると、全心是れ眼、全身是れ耳といふやうにそれに気を取られる。……

柳田國男は、人間が進歩し変化を遂げる存在であることを理解しており、それを抽象的ではなく、動きの現場においてとらえてもいた。これは個人主義への柳田國男の理解とみてもよいであろう。そこで注目されるのは、個々人の進歩への柳田國男の信頼が、田舎の若者の行動にほかならなかつたことである。しかもそれは、〈都会のうかゝした生活を続けて居る人々〉と対置して称揚されるものでもあつた。それゆえ、都市と農村の理解とも重なつた。柳田國男は、日本の歴史を通じた日本の国情を次のように論じている。それは外国との比較における日本の特質にほかならない。

たとへば我々が爰に考へようとして居るのは、申す迄も無く「日本の都市」である。支那をあるけば到る処で目につくやうな、高い障壁を以て郊外と遮断し、門を開いて出入りをさせて居る商業地域、そんなものは昔からこの日本には無かつた。然るに都市とい

ふ漢語を以て新たに訳された西洋の町場でも、やはり本来はこの支那の方に近く、言はゞ田舎と対立した城内の生活であつた。尤も近世はどこも人が殖えて郊外に溢れ、今では寧ろ其の圍ひを邪魔者にして居るのだが、しかも都市は尚耕作漁獵の事務と、何等直接の關係を持たぬといふのみでは無く、そこには市民といふ者が住んで居て、其心持は全然村民と別であつた。都市の歴史は即ちその市民の歴史であつた。従つて特殊の利害は積重ねられ、之を擁護するためには時として村と抗争すべき場合さへあつたのである。

たしかに中国でも西洋でも都市が城壁によつて囲まれていることは、一般的によく知られている。もつとも、近代に近づく時期になれば、中国も西洋も、町には必ず城壁があるわけではなくなつたのも一方の事実であつた。中国で言えば、防壁でかこまれているのが〈城〉であり、国家の行政機構の直接の末端である。そこには役所がおかれ、また軍隊も駐屯している。それに対して、都市からやや離れた多くの農村が産物や生活物資の売買するための集落も各地に成立した。そこはもとは定期市の場所や交通の結び目であつたが、後発地であるために、必ずしも城壁をそなえていない。それが〈鎮〉であり、鎮もまた時と共に大きくなり定住の場所となつた。またその成り立ちから、国家の諸機構の末端という性格は薄く、そのため中国の各地域には〈城〉と〈鎮〉という性格のことなる二種類の町が網の目をつくるようになった。これについては費孝通の城鎮研究がおこなわれている²。一方、西洋でもどの町も壁をもつとは限らなかつた。中国と似ているとも言えるが、やはり定期市の場所が自ずと定住地としても発達した。それが“Markt”である。これにはカール＝ジーギスムント・クラマーなどの研究がある³。都市の厚い防壁についてその有無を単純に対比されると、そうした補足をつけてみたくなるが、それを加味しても、大づかみには、日本の都市が住民をも包含できるような都城ではなかつたのはやはりひとつの特徴であろう。またそうなると都市と農村の境がはっきりしないという論も成り立つ面がある。柳田國男は、そこに日本人の歴史に即した国民性を読みとつた。

創設当初の日本の都市は、今より遙かに村に近いものであつた。所謂屋敷町にはつい此頃まで、まだ沢山の田舎風の生活法が残つて居た。といふわけは士は殆ど全部、やはり

2 費孝通の研究では、中国社会における小城鎮の意義を強く意識したことが特筆されるが、それにあつて城と鎮の歴史や性格についても考察がなされている。参照、費孝通(著)『小城鎮四記』北京：新華出版社 1985.; 同『江村經濟：中国農民の生活』南京：江蘇人民出版社 1986.; 同『郷土重建與郷鎮發』香港：牛津大学出版社 1994.

3 参照、Karl-Sigismund Kramer, *Bauern und Bürger im Nachmittelalterlichen Unterfranken: eine Volkskunde auf Grund archivalischer Quellen*. Würzburg 1957.; Ders., *Fränkisches Alltagsleben um 1500. Eid, Markt und Zoll im Volkacher Salbuch*. Würzburg 1985.

亦農村から移つて来た者であつて、其収入の簡易さは特に田舎の住居の模様などを、改める必要を感じしめなかつたからである。しかも眼前の新境遇を大切に固守して、最も早く故郷と絶縁したのも彼等であつたが、尚周囲には多くの村に生まれた者が、仲間小者などとなつて付随して居た。彼等が自分たちも町に住みながら、他の一半の商業に携はる者のみを、特に町人と名づけて別階級視し、力めて異を立て感染を避けようとして気風の起り、即ち武士の特色とした質素無欲率直剛強の諸点は、本来は身分や権力とは関係無く、村から以て出た親譲りの美德であつて、同じく刀を指す人に威張られて居た者の中でも、地区を隣接して住んで居た町人よりは、よほど百姓の方が生活の趣味に於て、彼等に近い所が多かつたのである。

日本の歴史の教えるところでは、武士は元はいわゆる開発領主^{かいほつ}の流れを汲んでいた。〈一所懸命〉もその所有し得た土地に身命を賭した彼らの心構えとライフスタイルに遡るとされる。鎌倉幕府が滅びたのも、増え続ける武士たちに一所を保証することができなくなったからであり、室町幕府が弱体を強いられたのも一子相続の原理と相続者の選定にあつての基準を確立し得なかつたからであつたとも言われる。その点では、柳田國男の論は裏づけのある見解であつた。

士農工商の名目はいつから始まつたか知らぬが、猶太人の様に先祖代々、商ひの道しか知らぬといふ家筋は、我邦には殆ど無かつたので、従つてそれから以後も商人の卵を要請するのに、いつでも年季奉公を村民の中に求め、又其中から次々に立派な新店が崛起した。単にそればかりで無く、番頭手代の律義又精勤なる者を見立て、家の娘を娶はせ、或ひは株を譲り或ひは幼弱なる弟息子を後見させ、又は衰へか、つた家道を恢復させるなどは、日本特有のしかも普通なる町風であつた。敷銀と称して多額の持参金を携へ、在所の物持の二男三男が、養子に入込むといふ例も多かつたらしく、是を一種の資本調達法として居たことが、西鶴其磧の小説には屢々見えて居る。要するに都市には外形上の障壁が無かつた如く、人の心も久しく下に行通つて、町作りは乃ち昔から、農村の事業の一つであつた。どこの国でも村は年人口の補給場、貯水池の如きものだと言はれて居るが、我々のやうに短い年月の間に、是ほど沢山の大小雑駁の都会を、産んだり育てたりした農民も珍しいので、従つて少々の出来そこなひ位は、適當の時に心付きさへすれば、先ず我慢をするより外は無いのである。

この一節からも知られるように、日本人の生き方については、農村ないしは農村的なものが土台であり本家であつたとされる。しかもそれは発端だけのことではなかつた。その後も農村は水源であり、兵站基地であり、それどころか本営ですらあつた。それに対して都

市ないしは都市的なものは派生であり分家のような性格であったということになる。本営たる農村に対する前線であった。それが説かれるときの力点を勘案すると、それは柳田國男にとっては日本の社会原理とも言ってもよいものであった。そしてその見解は一種綱領的な表現にまとまってゆく、都市と農村の小見出しともなっている〈土を離れた消費者心理〉である。

「土を離れた消費者心理」

私の想像では、衣食住の材料を自分の手で作らぬといふこと、即ち土の生産から離れたといふ心細さが、人を俄に不安にも又鋭敏にもしたのでは無いかと思ふ。

この箇所だけ読むと、柳田國男でなければ思いつかなかったほどの指摘とも見えないが、背景を加味すると、かなり奥行きのある言説である。しかしまたそれが結論である以上、都会人が土との接触が希薄であるという今日誰もが言うような平凡な見方であることも、ことからの一面と言わなければならない。そこに以後の問題が胚胎しているように思われる。

第三部：宮田登の都市・現代民俗論の検討

1. 民俗の縮少への対応：柳田國男との接続

日本民俗学が現代社会と直面したときに不可避となる課題を直接的に感じとり、またそれを生産的に解決した人を挙げるなら、それは近い過去に逝いた宮田登であろう。氏の問題意識は、民俗学が対象とするような現象をめぐる一種の構造的な変動との直面であり、またそれに気づいたが故の専門分野にかかわる危機意識であった⁴。

近年都市の民俗研究に関心をもつようになったのも、民俗学の調査で古い農村を訪れて妖怪や幽霊などの話を聞いてみても、古老たちにいささかいぶかしげに受けとられてしまい、資料がうまくでてこないのに対し、賑やかな町場では逆に昨日不思議に出会ったような具合で生き生きしたデータにぶつかるからである。

つい二、三年前に大流行してた口裂け女にしても、山中奥深くおどろおどろしき妖怪として出現したのではなかった。盛り場のスーパーマーケットや道ばたに現れて子どもを脅かすのである。東京では三軒茶屋あたりに出たという噂があったり、私の勤務先の筑波大学の周辺にも出現したというニュースを水戸へ行って聞いたこともあった。これも筑波山中ではなく、コンクリートで固められた学園都市の真中なのだから、これから

4 宮田登『都市民俗論の課題』未来社 1982, p.143-150 (II. 都市の心意 2. 都市空間としての浅草) here p. 150-151.

のお化けの考現学もフィールドを都市に限定した方がよさそうなのである。

口裂け女は、妖怪の一種で、一説に子育てに狂わんばかりの母親イメージのパロディだという。……

そしてその解決を日本民俗学の大宗である柳田國男を読みなおすことにもとめた点に宮田登の基本があったようである。

民俗学が近代化のなかで起きる必然性、それは消滅に向かうものに気づいたがゆえに成り立つ学問であることを、宮田登は率直にみとめている。そのさい、民俗学が認識だけでなく〈文化の核をとらえようとする運動〉であるとも説いている⁵。それゆえ、学問が相手取る対象が縮小し、さらに消滅に向かうなかで民俗学はどこに課題を見出すかという問題についても、柳田國男の認識に手掛かりをさぐっている。正に柳田國男の衣鉢を継ぐものと言ってもよい。

われわれが民俗学を学び始めた1960年代以降の高度成長期は、民俗学にとってはエポックメイキングであった。民俗学を学ぼうとする時点で、民俗というものは遠からずなくなるだろう、という話を聞かされた。民俗が急速になくなりつつあるということは民俗学にとって、研究対象がなくなってしまうことである。だから民俗学も消滅していくであろうという不安感につねにさいなまれていた。

しかしこのことは、明治40年代にすでに柳田國男自身が、民俗が消滅するということを前提に民俗学を成立させていたことなのであり、柳田國男に限らず諸外国の民俗学は、文明民族の当然の帰結点として、それぞれの国の地方に残る前代の生活の風俗習慣を、文化の核をとらえようとする運動でもあった。つまり、民俗学研究は、方法であるとともに運動であったし、その存在は文明民族に課せられた一つの使命であったといえる。

柳田國男は昭和10年代に日本民俗学の体系化の方向をとったが、他の国々でも民俗学は近代化とうらはらに起きてきた学問なのであり、一方で研究対象はどんどんなくなるのではないかという不安はつねにいだかれていた。ヨーロッパの民俗学は産業革命以後、農村に残っている古い民具、生活用具を集めたり、あるいは昔話や民話を採集してきたりする、という文脈の中では、生き残ってきた。しかし柳田國男は日本の場合は特別であると『民俗学の現代性』の中で強調している。日本には民間伝承が西欧とは違って日常生活の中に強く残っているということが前提となっている。それは物とか形以外に、精神として残っているというのである。

5 宮田登『〈心なおし〉はなぜ流行る 不安と幻想の民俗学』小学館 1993, p.214-215.

柳田國男が留意した日本と西洋との違いは、先に見た都市の農村の関係だけではない。西洋では古い信仰や習俗をキリスト教が消滅させたのに対して、日本では上古の文化がその後の生き続けているとの見解も、柳田國男がしばしば説いたところであった。それはともあれ、ここでの議論は都市と農村の連続であろう。しかしまたそれを必ずしも広げも深めもしなかった、と宮田登は指摘する。要点を言えば、都市民の基本にあるのは〈不安〉であるが、それをえぐり出した柳田國男は自身ではその容量を究めなかった、と言う⁶。

「新しい民俗学」の方向は積極的に都市と取り組むと同時に、現代社会に対抗できる分析力を備えることである。農村とか田園の対立概念として都市をみる場合、農民が「お城下」を大切にしたのと同じように、高層ビル、大きなスーパーマーケット、洗練されたファッション、繁栄した人々の生活、そういう見方が一方にあらう。他方には公害に代表される汚染の問題、衝動殺人のような犯罪の問題、家庭問題では核家族が生み出したさまざまな悲劇がある。孤独な生活がありムラがもつ安全なイメージに対して危険なイメージが都市には多い。快適なものがある一方、不快を与えるのが都市である。都市というのは素晴らしいものだという見方に対し、都市は危険なものだという考え方を、民俗学的立場からも抽出できるのではないか。都市の中に潜んでいる犯罪とか、不安とか、危険な状況、これらは社会不安として一括されるし、精神病理学的にいうなら、都市のもっている病理である。自然や生活環境を破壊していくなかで都市の繁栄が作られてきたから、都市が作られる代償として必然的に危険な要素もはらんできた。

ところが、早くから都市に取り組み、また現代人のもっている不安な心理を通してフォークロアが組み立てられているであろうという予測を、柳田國男もすでにしていた。「都市は不安によって支えられている」という言い方を柳田はしているが、その不安の実態を民俗学として、あるいは民俗事実として究めようとはしなかった。純粹で古風な民俗のみを精力的に集めようとして、結果的には文化財保存の一助にはなったけれども、現実に生きている民俗としてとらえることには失敗してしまった。そのツケが今、出ているといえよう。現代の都市人間のもっている心意をどのように解釈していくか、それらをとらえる手段に立ち遅れていたということが分かる。

そこで民俗学とは何かということと深く関わってくることは明らかだが、民俗そのものが都市の中にあるというなら、それはどのように存在しているのか。都市の中で民俗は死滅しないで十分に生きているというならば、それはどうやってとらえるのか、その場合都市とか農村に分ける必要はすでになくなっている。日本列島すべてが都市化しはじめているわけだからである。……

6 宮田登『〈心なおし〉はなぜ流行る 不安と幻想の民俗学』小学館 1993, p.229-230.

この一文には、現代に留意した場合の宮田登の柳田國男への関係が端的に表現されている。一口に言えば、継承と発展である。先師の原理を受け入れ、同時に、先師が原理をつかみながらもなお説き切らなかつた敷衍の作業を手がけるというのである。その点では、宮田登は、柳田國男の理想的な継承者であった。

2. 宮田登が説く都市民の不安の諸相

都市民をもふくめた民衆の一般的な行動法則をとらえるために措定された日本民俗学の概念に〈ハレ・ケ・ケガレ〉があるが、これにも農村と都市の関係がからんでいたところがあったと思われる⁷。

従来のハレとケはたしかに農民の日常使っていた用語を探りだし、その背景にある精神的な心意を求めようとする民俗学の方法によって出てきた概念であるが、日常生活の場は、都市と農村が混在化していることは明らかである。伝統的に日本の都市は、城下町、門前町、宿場町、港町、などに分類できる独自の空間があるといえる。

しかし、都鄙連続体といい、農村と都市とが対立関係を持たなかつたという、日本的な特色が一方にはある。柳田國男「都市と農村」(『定本柳田國男集』第16巻)の中では、都市と農村とは従兄弟のような関係で、したがって最初に農村のことを調べれば、都市のことも分かってくる。農村が分からなくなったら、都市のことを知らなければ、農村のことも分かってくるだろう。つまり両方を調べていけば、日本文化の全体像がつかめてくる、と解釈していた。

だが実際には、民俗のフィールドワークといえは農村の方に傾斜していたことも確かだったのである。

(怪異譚を中心に見た都市民俗の性格)

都市の民俗として宮田登が特に熱意をこめて論じた一つは怪異現象や怪異譚であった。多くの個別研究にも目配りされているが、たとえば次のような話題がある⁸。

最近の常光徹による「学校の世間話」に関する研究も、「世間話」を口承文藝の領域においてのみ対象とすべきでないことを、はっきり示してくれた好論といえるだろう^(*)。大都市とその周辺の小・中学校の生徒たちの間に、独自のフォークロアが認められた。常光は「コックリさん」や「せんまさま」と称する不思議な遊びが、都内の小・中学校

7 宮田登『現代民俗論の課題』未来社 1986.3. 都市の生活心意 2.民俗学と都市 p.21-22.

8 宮田登『現代民俗論の課題』, p.35-38 「4.都市民俗を考える」(*)常光徹「学校の世間話 — 中学生の妖怪伝承にみる異界的空間」『昔話伝説研究』12号(1986)

の女子生徒の間で流行していることを問題にしており、そこには、神霊の憑依現象ともいえる民俗宗教の一つのタイプが発現しているとみている。

……その中の話題として多かったのは、学校のトイレ、しかも女子トイレに出没する妖怪の話である。……常光は、学校の怪談が、校内の特定の空間と結びついている点を指摘している。それは、怪異の発現する場所が、普通教室ではなくて、特別教室ないしは付属施設に限定されているという。生徒にとって、特別教室は非日常的空間であり、その独自の装置が、怪談の中心的モチーフに組み込まれ、話の効果を高める役割をもつ。また夕方から夜間にかけての学校は、昼間とちがって子供たちが去った後の静寂な世界であり、不気味な様相を帯びた空間になるという。

常光は、学校という生徒の活動領域の中に、異界性を伴った空間が存在し、そこに関心をよせる生徒たちが、無意識裡に、豊かで多彩な話の世界を保有しかつ演出しているという点に注目している。興味深い点は、女子の小・中学生で、年齢的には十一～十三歳ごろに多くこれらの怪異譚が語られていたことである。ちょうど初潮の前後にあたる時期で不安定な情緒の状態にある。それが都会の学校という空間における集団生活の中で、より深く異界と交流することを契機として、妖怪をイメージしたことになる。大都会の学校社会が、共通していただいている共通要素が、ここに存在しているのであるう。

学校になかに空いた〈非日常性〉の空間、また女性の成長過程における〈不安定な情緒の状態〉の時期が抽出されるが、それはその限りにとどまらず、さらに都市生活の一般的な性格ともつよく重なっている、と宮田登は考察をひろげている。

「なるほど昔の人が信じていたようなお化けや幽霊はいなくなったかもしれない。だがそれだけで、現代には怪談がないと言いきることができるだろうか。いやいや、人間が恐怖心を失わない限り、この世から怪談の種がなくなるということはあり得ないのだ。あの馬鹿馬鹿しい、間の抜けたお化けや幽霊はいなくなったかもしれないけれど、その代わり、もっと気味の悪い、なんとも得体の知れぬ怪物が、ネオンライトに彩られた、この近代都市の一角にひょいとおして顔を出すことがある」(横溝正史『首吊り船』)という記述は、昭和11年に書かれた横溝正史の作品の一節である。この横溝の発想は、近代都市の空間に、正体不明の怪異が突然として発現してくる必然性を問いかけているようだ。都市生活者たちの潜在的心意の中に、共通要素としての「社会不安」や「異常心理」が内在しているのではないかということは、以前にも指摘されたことである。知性の集中する大都市には、非合理的要素は本来排除されて然るべきであるにもかかわらず

ず、そうはならない。前出の常光の調査結果はたまたま学童の社会の事例であるが、一般論として都市社会に共通する心意を象徴しているといつてよいのである。

〈不安〉としてまとめることができるような心理のあり方が都市と都市生活者の一般的で共通な心意の特質であるという風に論は広げられている。⁹

精神病理学の野田正彰は、「都市人類学」ともいべき都市住民の心理状況を、「移動の途上」と位置づけて考察している(*)。……

高層住宅という住居空間で持ち出している現象は、エレベーターを利用した性犯罪と飛び降り自殺であり、とりわけ後者には、板橋区高島平団地が「自殺の名所」に比定されている事実がある。野田は、コンクリートで固められた高層住宅には、外の世界と私の空間との間に、「地下のチューブ」といべき正体不明の通路があることを特徴としていると説明している。人は地下鉄を除いて、チューブを通して、自分の部屋の鉄の扉までたどりつく。「あたかもそれは、人を流す下水道のようであり、そこで人びとは他人を認めても、なお選択的に見知らなさを装わねばならない。半分の意識の中で行なわれる選択的な不注意、それが大都市に生きる人間の重要な感性である」という。そこには共同体としての二元関係を成立を難しくする状況をもたらしている。過密都市の環境が心身に及ぼす影響という点に絞ると、精神病理学的に見て、都市生活者は明らかに心身不健康の症候を呈していることが、さまざまな統計から暗示されている。高層住宅は、狭さと孤立そして運動不足をきたす要因をすべて備えているといつて過言ではないのである。

つまり都市社会は非人間的な生活空間によって占められ、つねに精神的不健康の度合いが深められている、ということになるのであり、それが他方では、「不安な気分」をたえず醸成していくのであり、それが「都市民俗」の一つの特色を生み出すことになるのであろう。……

しかし、野田の都市論が精神病理学的にみて絶望的な把握にのみ終始しているのかというと、かならずしもそうではない。都市自身の発展史の文脈からいって、巨大化した現代都市は、情報のセンターであり、成熟産業の中心地であり、文化的には混沌とした盛り場悪場所を内包している。……

都市に充満する〈不安〉を指摘することに、論者が力点をおいていることは、これを見るだけでも十分である。しかもそれは、都市をめぐる本質でもある。

9 宮田登『現代民俗論の課題』, p.39-42. (*)野田正彰『都市人類の心のゆくえ』日本放送協会 1986.

「都市民俗」の領域は、右のような視点をもつ精神医学の調査研究とむすびつくことはいうまでもない。都市の繁栄と絶望という精神世界の反映の一面が都市社会の民俗宗教を規制する、という予測が成り立っている。たとえば国立歴史民俗博物館における民俗展示の冒頭にある「都市」は、日本の伝統都市の志向を説明するにあたって、現代都市の信仰生活をクローズアップしている。多様な心願を表現する小絵馬や流行神のあり様は、華やかな盛り場の基底に横たわる都市民の「不安な気分」を示すものと思われる。

宮田登のかかる視点は、都市と農村という二項関係にもつばら集中している。それは歴史的な制約をほとんど考慮する必要がないほど原理的・本質的なものとして考えられている。そのため、その関係は、歴史を通じて適用することもできる性格をもつものもなっている。現代の様相を論じたのと同じ視点で、宮田登は100年前の世相にも200年前のできごとをもとりあげる。次はその一例である。

〈池袋の女〉にみる都市近郊の位置づけ

この話題を宮田登は繰り返しもちいているが、ここではこれまでと同じ論集からその箇所注目しておきたい¹⁰。

……『柳樽宿の賑ひ』と題した柳樽の絵本に、「下女が部屋地しんこいつ池袋」の句があり、この絵柄は、部屋の中の行燈や煙草盆、火鉢などが空中に浮かび上り、天上にぶつかってひっくり返っており、これを見た男が腰を抜かして驚いている有様である。「瀬戸物屋どびんがみんな池袋」というのも、やはり室内に食器がとびまわった状況の句である。「まちまちな評議の下女は池袋」というように、この奇妙なできごとの中心は、下女でかつ池袋出身という限定がついている。池袋村生まれの女が江戸市中の武家屋敷に奉公している最中、不思議な空間が現出する。当時同様のモチーフで「池袋の女」についての世間話が、流布していたのであった。器物が浮遊する現象については、そこにある種の霊的な力をみとめようとする傾向があり、その霊的な力は、「池袋の女」を根拠としていたと想像される。この池袋と並んで池尻村（現世田谷区）の名も上がっている。ともに江戸の近郊農村で、都市化する以前の地域であること、そして池の字で共通するような地形もっていたらしい。「池袋池尻あたりの女は召使い給わずや」（『耳袋』巻二）という記述は、池袋とか池尻という江戸近郊農村出身の下女に不思議な霊力を感じとったことを示している。……

10 宮田登『現代民俗論の課題』p.76-81（第一部「都市の民俗研究」9.妖怪の社会史）here p.79-81.

ここでは話題は〈池袋の女〉であるが、都市民俗として一般化できるものを含んでいる、とされる。つまり〈学校の怪談〉という個別の話題から都市民俗に関する一般論へと拡大されたのと基本的には同じ論法で宮田登は一般化を行なうのである。学校の怪談では、学校のなかで特殊教室が非日常の空間となっているとされた。それと同じく、江戸という空間のなかに落差が存することが指摘されるのである。土台には都市と農村の関係があるとされ、その二項関係を前提に、両者が接触する〈境界的近郊〉が想定される。境界が、異なった性状にある複数のものの交叉や移行の場であること自体は語義の通りであろう。また近郊が、都市とその周辺の非都市的な空間の間であることも通常の認識であろう。しかしその通常の理解の水準をはるかに超えて、宮田登の推論は延びてゆく。つまり江戸は比類ない大都会として殷賑と栄華の場であったが、それは氏の理解では不安と背中合わせの営みの場ということをも意味していた。そのため、都市と内側とその外側の世界の相互の異質性は極度にまで引き延ばされ、境界たる近郊の意味も濃縮されてゆく。境界における異なった性状のものとの対比は極限的なまでの次元として想定されるのである。すなわち、江戸の都市空間とその外側とはこの世とあの世、現世と彼岸の性格を帯び、それゆえ境界はこの世とあの世の行き交う場となり、そこでは靈異が発現してもおかしくないことになる。なにゆえそうであるかと言えば、〈繁栄と不安が表裏一体〉であることは都市民の〈心的構造の核〉だからであるとされる。しかも江戸で形成されたその仕組みは〈原基〉とまでみられ、原基であるゆえに、理の赴くところ、現代にまで影響し続けているとも説かれる。のみならず、それは、どこそこの土地、と地名を挙げて説明できるほどリアルな現実と解されている¹¹。

……江戸は複合都市であるが、出発点は、隅田川、荒川に沿った境界領域にあったと思われる。隅田川の西岸から、浅草の都市空間は形成されており、浅草の北側に吉原が栄え、さらに北東縁部にハシバの地名が残っている。ハシバには「夢の浮橋」の伝説もあって、かつてこの地点から向こう岸へと渡っていったのであった。墨田川の東側を向島というのは、西側を内側とすると外側を表現する地名にあたる。本所の隅田川の東側に新開地として発展した空間であるが、兩岸に西国橋がかけられることによって、東の橋際に怨霊を鎮めるための回向院が作られ、見世物小屋が林立したことはなほだ暗示に富んでいる。橋によって二つの世界が連結し、その通路を経て、都市民は向島に渡り、異界の体験を果たすことができる。現世に彼此の世界を確認できるところが、繁栄と不安を表裏一体としている都市の心的構造の核にあるとみるならば、現代の大都市の中に、そうした原基となる部分を発見することが重要であろう。

11 『現代民俗論の課題』 p.57-58.

しかし都市の内側と外側をこうして此岸と彼岸というようなところまで極限的に考えることがどこまで妥当であろうか。それはここでふれられている具体例の説得力への疑念とも重なる。浅草や回向院や向島や両国橋がその文脈で引き合いに出されるのであるが、過ぎた深読みというきらいもある。向島は景観的な位置関係に起因する表現として全国に類称があり、それは向山なども同様である。両国橋も、武蔵の国と下総の国を架けわたす位置のゆえの名称であったとするのが常識的な見方であろう。しかしそれではすまずに、あの世とこの世の意味とされるのであれば、それに相応しい証明がもとめられるであろう。そして、これらすべてが宮田登にあっては、柳田國男の都市の農村の二項関係を基底にしているのである。逆に言えば、柳田國男の論説を限度まで拡大されるところに宮田登の現代民俗学の本質的なものがあるであろう。「都市民俗学への道」と題された論考の一節では、都市民の〈心的構造の核〉とは、ほかならぬ柳田國男の指摘したものであると論じられている¹²。

……柳田民俗学における都市の扱いは、右の『都市と農村』と、『明治大正世相史』の内容にとどまっておき、農民史とくらべると手薄である。しかし、柳田は都市民が都市民らしさを備えるいわば中核にあったというべき心的構造をあげやかに指摘していた。それは土の生産から遊離したために漠然といただく不安感であり、その不安感を解消すべき日常の営みが、都市的文化の源泉になり得るという考え方である。

原点はやはりここなのである。「都市民俗学の志向」でも柳田國男の議論が改めて丹念になぞられる¹³。

……「要するに都市には外形上の障壁が無かつた如く、人の心も久しく下に行通つて、町作りは乃ち昔から、農村の事業の一つであつた」。これが柳田の都市論の骨子となっている。

次に重要な点は、町風とか町の気質といえる町人の心的構造把握ということであった。興味深い指摘は、「衣食住の材料を自分の手で作らぬといふこと、即ち土の生産から離れたといふ心細さが、人を俄に不安にも又鋭敏にもしたのでは無いかと思ふ」という点である。いかに都市と農村とが互いに人心を共通理解し合えるとしても、なお都市らしきの気風の異質さが形成されているにちがいないという前提があった。そこに都市民俗の存在を認めるとすれば、その中核となり得る要素が求められねばならない。柳田の指摘した、右の「土の生産から離れた心細さ」とは一体どのような民俗を醸成したかが

12 宮田登『都市民俗論の課題』未来社 1982, p.20 (1. 都市民俗学への道)

13 『都市民俗論の課題』(II. 都市民俗学への道 2. 都市民俗学の志向) here p.36.

関心をよぶだろう。

先に〈学校の怪談〉を糸口にした現代の都市民俗の一般化と、〈池袋の女〉を手掛かりにして都市としての江戸の心理を趨勢を見たが、それと同じ構図の推論に何度も出会うことになる。そこで現れるのは、同じ視点に立った広い分野の見渡しである。柳田の着想という芽がもっていた可能性の大きさでもあり、またそれを拡大させた後継者、宮田登の培養技術の巧みさとそれに注いだ情熱の程に改めて感心させられる。同時にそこには一種の装置が取り入れられていることにも気づかせられる。民俗学の財産の特殊な活用である。

民俗学からみた〈若い女性〉

先に〈池袋の女〉をめぐる宮田登の考察を検討したが、そこには都市近郊であることに加えて〈若い女性〉であることも要点となっている。この性と年齢期に、宮田登は特別の意味をもたせている。「ポルターガイストと下女」という論考では次のようにまとめられている¹⁴。

……化物屋敷として世間話に伝えられてくるなかで、とりわけ若い下女が何かかわりを持っているという点は興味深い。下女といっている若い女が、一定の土地や、屋敷とつながりを持って、語られているのである。つまり土地とか家にこもっている霊を引き出す役割を下女が行っていることになる。たとえば江戸時代の末によくしられた「池袋の女」という話はその典型例であろう。……

江戸の世間話のあら筋は、旗本か、御家人の家があって、そこに一人の下女が雇われている。雇われた下女は池袋村の出身だとされている。池袋は、いまでは東京の副都心の一つになっているが、江戸時代には江戸郊外の小さな農村であった。そこはちょうど市街地の外れにあたる境界領域であった。……

その下女が奉公先で犯され、それを機に器物が跳ね暴れる怪音がきこえる不可思議が起きることになるが、これについても説明の原点を柳田國男にもとめる論説がなされている。

ところで柳田國男は、この件について東京郊外に異常な心理が発生していると説明している。これは恐らく都市化現象と関係するのだろう。とくに都市化する空間において若い女性の示す精神作用が、こうした不可思議な力を起こしているとみている。

14 宮田登『妖怪の民俗学 ― 日本のみえない空間』岩波書店 1985, 1990 (同時代ライブラリー 52), p.79-98 「ポルターガイストと下女」 here p.79-80.

さきにもふれたが、農村の都市化、ないしは農村の人間の都市への移入という不安定と、大人になりかけている若い女性の過度的な不安定を重ね合わせているのである。それは江戸時代だけのことではなく、現代にもあてはまる、とされる。

昭和五十一年六月、立川のあるアパートの二室だけがガタガタと鳴ったことがあった。そのことが「悪霊？ 謎の地震？」という見出しで新聞にのせられている（『スポーツ・ニッポン』昭和51年7月）。これは立川市の木造アパートの特定の空間が、原因不明のまま、四回にわたってぐらぐらと揺れたというものである。第一回は六月一日午後八時……立川駅から北へ約1キロ、立川市高松町三丁目の木造モルタル造りの二階建てアパート「鶴間荘」の住人、一階二号室の主婦が、二人の子供を寝かそうとして添い寝をしていると、突然箆音がきしみ電灯が大きく縦に揺れ、窓ガラスがガタガタと激しい音を立てはじめた。……急報により立川署から警察官が駆けつけた。揺れはおさまったかに思えたが、再びぐらぐらときて、警察官もびっくり。……

世相の記事に注目すると、こうした記事はしばしば出てくる。……

怪音とか怪異現象は先の「池袋の女」とよく似ているのである。こういう要素がくり返し起こり世間話となっている点で、何か共通要素が抽出できるのではなからうか。……

そして次に江戸時代中頃の事例と、『北越奇談』の載っている寛政年間にとされる事例が紹介される。そして次のような説明が来る。

日本のポルターガイストの現象の場合に必ずその近くに若い女がいた。前述の「池袋の女」はその典型的な例である。若い女が引き起こす霊的な力は無視できないのである。……

この問題で、重要なのはこの現象が大都会にしばしば生じていることであり、そのことは柳田國男が都会に異常心理が働いていると指摘したことを示すものであろう。

若い女性に特有の霊的なものに傾く資質と都会にただよう不安の重ね合わせであり、またその理解の淵源を柳田國男にもとめるという構図である。しかも、江戸時代の事例も現代の事例も同じ構図において説明されるのである。その論法を支えるのは、農村と都市について柳田國男が指摘した関係が本質的なものとして現代にも適用されることにあるであろう。それは原理であり、原理である以上、どれほど時間が経とうと、都市が段階を経てどれほど発展しようと、それら無視されるのである。

〈民俗空間〉の指定をめぐる

民俗地政学というものが成り立つかどうかともかく、そういう形容にさそわれるような行論が宮田登の論説にはしばしばみとめられる。それを宮田登は〈民俗空間〉と表現し、その論考において大きな役割を果たしている。〈池袋の女〉における江戸〈近郊〉の位置づけもその性格を持つが、それは都市の農村の交流における不透明と女性の年齢的な不安的との相乗であった。それは次のようにまとめられてもいる。

それに加えて、先に見た〈境〉への言及においてすでに現れてもいたが、ある種の地勢や地形というスポットをめぐる民俗学の知識が援用される。そして一種の法則があるような議論がなされるのである。宮田登自身もそれを〈トポス〉と呼んでいる。あるところでは〈辻と交差点のトポス〉とも表現し、古くからの〈辻〉と現代の交通システムの呼び名である〈交差点〉を同列において、歴史を通じて同じ構図で理解している¹⁵。

妖怪の出現にあたっては、その場所性というものが、強く影響していることはこれまでも指摘されてきた。具体的には、三辻とか四辻といった道が交差する地点あるいは橋のたもとであるとか、橋の中間部、坂の頂上とか、坂の中途などに独特の境界がある。それは私たちが無意識のうちに伝えている民間伝承の累積として定着している民俗空間の中に位置づけられている。

たとえば、静岡市の繁華街を形成している浅間神社界隈の民俗聞き書きによると、周辺の農村部の人々がマチへ出てくる時に、ちょうど二つの空間の境界を通過するプロセスで独特な境にいる気分を味わったという。それはマチへやってきたという「気分」であり……そうした地点は景観的には、坂下の切り通しのような場所である。……その場所には古くから幽霊や狂女が出てくるという噂が広まったりしていた。あるいは狐にだまされやすい場所ともいわれたりしていた。

そして江戸時代の事例をあげ、ついで同じ文脈で現代の事例への言及へ移ってゆく。

最近の都会の若者たちの間で語られている怪談に次のようなものがある。バイクに乗った男が、近道の坂の途中で、「乗せてって」という女の声を聞く。男がそれを断り走っていくと、女が追いかけてくる。急いで逃げてほっとしていると思わずハンドルを切りそこねて事故死してしまう。高速道路を走行中であつたりする。ともに境界を通過する最中に、超自然的な何かに接触することによって生じた凶運を語っている。

15 宮田登『都市空間の怪異』角川選書 平成13年, p.76-81 (「辻と交差点のトポス」)

そして幾つかの事例を挙げた後、次のようにまとめられる。

辻とか、橋の上とかを通過する時の心意には非日常的な部分が働いていることが示される。橋の周辺に生じた幽霊話、現代の坂や高速道路で起こる原因不明の交通事故などはいずれも辻に起る怪異として共通している心意によるものであろう。

宮田登が民俗学の対象を大きく押し広げたことは見紛いようがないが、その仕組みの一つをここに見ることができる。辻に怪異が起き三叉路が人を迷わせるのは、おそらく古代も現代も同じようなものがあり、また洋の東西においてすら共通する感覚かも知れない。オイディプスが父親をそれと知らずに殺めたのは三叉路においてであった。そうした場所にまつわる伝承の蓄積に着目して、それを〈民俗空間〉と呼んだのは、宮田登の着眼であったろう。もっとも造語者であったかどうかは分からないが、ともあれ民俗空間を強調することにより、伝承が語られてきたのと同じ構図を現代の諸相にあてはめることができるようになったようである。つまり、坂下の切り通しを歩むときの境界を踏み越える感覚と、同じ地形をバイクで走る若者がもつ研ぎ澄まされた通過の感覚を同質のものとして理解することができることになる。人間が交通という行為を続ける以上、坂も三叉路もなくなりようが無い。そこに軸をすえて見るなら、通過の感覚は、徒歩であれオートバイであれ、さして違わなくないものとしてとらえることができる。となると、伝承を現代に重ねることができることになる。かくして伝承は少しも死滅せず、現代にも通用する、あるいは少なくとも相似形のものとして現れる。となれば民俗学は対象の範囲は確実に広がるのである。この仕組みを自らも活用したのが宮田登の民俗学であった。そこでの特徴は、歴史を越えてものごとを理解できる視点であるが、それは別の面から言えば、歴史を捨てる視点でもあるであろう。とまれ、具体例をもう少しみてゆきたい。「江戸の七不思議」を題された論説がある¹⁶。

……狐をカミに祀り稲荷とした祠が、東京にやたらに多いのは、江戸以来の伝統であり、稲荷の古社は、いずれも高台の端の方に多く分布している。台地には最初武家屋敷や寺社が集中的に建築されており、高台と対称される谷合いの低地は、後から開発されてきた。台地の周縁部がいわば上の世界と下の世界との境にあたり、そこが聖地視されていた結果である。

狐は土地の守護霊の性格をもつのであり、稲荷の祠が数多いことは、江戸と東京の特色の一つとなっているが、いわゆる都市化のプロセスで、人間側が自然の領域を侵食し

16 『都市民俗論の課題』(II. 都市の心意 5. 江戸の不思議) p.168-172,

ているという一種の負い目を自覚していたことをものがたっている。

そこではまた〈馬鹿囃子〉や〈狸囃子〉にもふれられるが、それらも含めて〈七不思議〉の解明がおこなわれる。

七不思議という言い方は千差万別であるが、それぞれの土地ごとに住民たちが、自分たちの周辺の生活環境の中で、不思議だと思われる現象を選びだし、好んで七つに仕立てたものである。……

七不思議をしきりに話題にしたのは、十八世紀中葉過ぎてからのことで、江戸の知識人たちが、江戸を離れた諸国の七不思議を奇事異聞の情報として記録した。ところが七不思議は、何も遠隔の異郷の地にあるのではなく、江戸という大都市空間の中にも形成されていることに気づかれ出したのである。麻布や本所をはじめその数は十指をこえる。しかもそれぞれの共通する要素があった。……

七不思議の発生した地点は、大川をはさんで大橋でつなげられた部分、永代橋だと、深川と八丁堀、两国橋だと本所と馬喰町、さらに千住大橋の兩岸。さらに洪積台地の端にあたり、高台と低地の差がはっきりしている麻布や番町などである。明らかに江戸という大都市が開発されていく段階での要衝になっていた。都市住民にとってみると、川や橋あるいは坂によって、周縁とか境を認識する地点であり、そこを超えると、もつ一つの別の世界になる。その時、不思議な音や光や形を共同幻覚としてとらえたのであろう。江戸という大都市が、その縁の部分に、かつての聖地を不思議な装置として温存させていたことは、依然都市の活力をよみがえらせ、自らを維持できる可能性を秘めていたことになる。……

これは直接的には江戸後期の話題にちなんだものであるが、現代の世相を論じた箇所でも同様の謎解きが行なわれる¹⁷。

都市型の犯罪には、突発的というか、衝動的というか、あつという間に人を害したり、殺したりする事例が多い。昨年六月、江東区森下の隅田川新大橋のたもと、しかも交差点の近くで、通り魔による連続殺人が起こった。つづいて千住大橋の近くの公園で中学生による殺人事件、荒川近くの赤羽で、出会い頭に男が殺された。いずれも橋の近くで頻発しているかに見えるが、むしろこれは都市の民俗空間に伝統的な現象といえるのではなかろうか。

17 宮田登『都市民俗論の課題』未来社 1982, p.160-163 (II. 都市の心意 3. 都市の犯罪空間)

辻斬りや辻強盗などは、辻空間に発生した典型的な都市の犯罪だった。辻は人々の集結する限定された空間であり、四辻とか三叉路などに見られるように、方角を違えた人たちが一か所に収束するところに意味がある。そこにはつむじ風が巻き起こり、一瞬視角から消滅してしまう空間もあり、大勢の人々が集まりながら奇妙な不安感を漂わせる場所なのである。古くから辻占の人気の高いのは、たんに人通りの往来が激しいので客が集まるということ以外に、辻に発生する心意の裏を判断するウラナイに適した場所だからだろう。

都市は、無数の辻によって重層的に構成されている。狭い小路の辻もあれば、広場となった大きい辻もある。橋と川の関係もまた辻となっている。そこに陸路と水路が交差しており、明らかに異次元の空間が相交わっている。……橋は二つの世界をつなぐ唯一の道であり、人の密集度も高くなる。ハシはそれぞれの世界の端でもあろうから、境としての認識も強いものがある。境の道祖神と同様に、橋のたもとに祀られる橋姫の信仰も、日本の民俗に古くからあった。

……新宿駅の北側にある淀橋は、以前、姿不見橋といった。かつてこの地で巨万の富を得たという中野長者が、淀橋のたもとに何度か財宝を埋めたが、そのつど一緒に同行した下男を橋の上で殺し、死体は、やはり橋のたもとに埋めたという。一度橋を渡った男の姿を二度と見かけないので姿不見橋の名がつけられたというのである。……

……荒川や隅田川あるいは神奈川県との境である多摩川などの橋や渡しの古伝説には同様のモチーフが読みとれるのである。

橋や辻などは、民俗的にある種の霊力がこもる空間であり、都市ではそれが人々の怨念や呪力となって、殺ばつとした事件を惹き起こすエネルギー源となっているようだ。

たしかに四辻や三叉路が普通ではない場所であるとは言い得よう。しかしそれは、交通の実態や通行する人や車両の視覚への影響という実際的なものである。交通にかかわる警察の注意や、自動車教習所などで、その分野の実験や理論を踏まえて指導が行なわれるものであり、それ以上でも以下でもない。少なくとも霊力を云々するような次元ではない。それでも、用心はしていても四辻や三叉路では事故は多発するとすれば、それは交通の調整のどこかに原因があるわけである。空間だけでなく、時間では暮色の迫る時刻は、用心が追いつかない〈逢魔が時（大禍時）〉になってしまうこともあるのは、それまた不思議ではない。宗教家や霊能者なら、その人知の限界に切り込みを入れて次元の異なる教説を説くこともあろうし、時には時空の論に加えて、関係者の家系の因縁を持ち出すかもしれない。それはそれで、立場上、職匠上、少しも構わないのだが、学者が説く性格のものではない。〈民俗的にある種の霊力がこもる空間〉という言い方は、民俗学の性質を帯びた採集が示すように多くの不思議な言い伝えがまつわる場所、といった意味なのであろうが、もう少し

表現に工夫がなされてもよかったであろう。羽田空港のまじかに残る神社の鳥居なども宮田登はその証左として言及しているが、民俗学の特殊な知識を離れば、霊力は何の関係もなく、正に胡乱^{うろん}でしかないからである。しかし民俗学が蓄積した知識をその分野を離れたところにまで延ばし、それが自明の前提であるかのように活用することによって、宮田登の都市民俗学・現代民俗学が成り立っているところがある。それは、柳田國男の教説を拡大するための装置の一つがここにある、ということでもある。と言うのは、その種類の論説を宮田登はかなり頻繁におこなっているからである。その事例をもう幾つか見ておこうと思う¹⁸。

自殺者が高島平の高層ビルを選ぶわけは、社会心理学的に説明できる部分も多いだろう。高島平は、典型的な大都市空間を形成している。人工美で覆われているが、これを高いビルの屋上から一望すると、何か微妙な感覚が生ずるようである。大正時代以前の熱海の錦ヶ浦とか両国橋という自殺の名所のような、あの世の入口を意識させる何かが、高島平団地の高層ビル空間の中に隠されているのかも知れない。こうした非合理的思考が温存されているのはもっぱら都市空間であることが、現代社会における一つの特色である。厄払いの呪術が、無意味なものとして片づけられる前に、これがより必要な生活手段として、現実に機能している事実を重視すべきであろう。

先にもふれたように、一見したところ非合理的な論理であっても、それを説くことができるのは宗教家や霊能者である。彼らの役割は、科学つまり特定分野として区画された専門知識の持主としてではなく、いわば全体智の担い手としてふるまうことに存するからである。そこでは、科学にもとめられる種類の因果性は絶対的な必要条件ではない。しかし民俗学は宗教でも霊媒術でもなく、科学の一つである。霊力の滞留を説くのも問題である以上、霊力の存続を前提として、その転用をうながすのも奇妙な論と言わなければならない。先の、橋や辻に怨念が滞留して殺伐とした事件が惹き起こすエネルギーがたまっていると説いた次のような社会政策への提言で締めくくられるのである¹⁹。

周縁とか境と意識した空間に犯罪が発生し易いならば、そこに秘められたエネルギーをプラスの方向に向かわせるよう働きかけることが、われわれ都市民に必要なことではあるまいか。

霊能者然たる口吻であるが、民俗学とはあまり関係が無い発言であるように思われる。特

18 『都市民俗論の課題』(II. 都市の心意 1. 現代社会と民間信仰) here p.139-140.

19 『都市民俗論の課題』p.163.

定の場所や空間を民俗学の知識をつかって〈非日常〉の場所と決めてしまう論説にも、これと同じ問題が含まれる。どこをどう見るかは、人により立場によって相違が出るのは当然で、民俗学の調査を通じて怪異現象が報告された場所であっても、それが多くの人々に一般的に妥当するものであるかどうかは怪しいと言わなければならない。しかし次の一節などは、特定の場所を〈非日常〉の空間と断定し、そこに都市民の〈不安〉を結び合わせる論法が短い文章でまとめられており、あだかも宮田登の都市民俗学・現代民俗学の縮図ともなっているように思われる²⁰。

以前から注目されてきたことであるが、浅草寺周辺に原因不明の行倒れの死人がよく集まってきた。『浅草寺日記』にそうした記事は事欠かない。……この点については、江戸における浅草という空間が、非日常性を帯びて居ることと関連するのではないかと考えたこともある。……

相対的なことではあるが、浅草界隈に横死者が続出しているのは、ここが大都市の中心だったからである。農村を離れて都市のど真中に来て、最後の死場所を浅草界隈に求めたり、死に急ぐ者の多かったことは、生産活動を離れた都市民の不安な心的状況をものがたっている。……

都市と農村の対比に発し、両者の一方に比重がおかれることは、これで十分に見ることになった。もっとも、宮田登の著作からこの種の論説を引き出すと数十カ所ではきかない。そのどれもが何らかの事例を引き合いにして説かれるのであるから、それは無限に適用できる立脚点でもあった。ところで、それらを追っていて、気づくことがある。つまりその観点の然らしめるところとして、宮田登の民俗研究にはもう一つの側面として価値判断がなされることである。言い換えれば、論者が、判定者、取り上げた現象に対して、その善悪良否、何らかの逸脱である場合にはそれがどの程度であるかをめぐって量刑を言い渡す裁判官として臨むのである。実際、宮田登の論考は誌上法廷の観を呈してもいる。それが、農村と都市という対比を基底にして、その一方に基準とするのであることに発しているのはあきらかである。

(口絵がつくる民俗法廷)

その事情を、ちょっと目先を変えて、宮田登の著作の口絵にみることにしたい。宮田登の著作には、一種の証拠として写真が付けられていることが多い。口絵の解説は短いために、主張が簡潔にまとめられることになるが、それがしばしば価値判断ともなっている。

20 『都市民俗論の課題』p.143-159 (II. 都市の心意 1. 都市空間としての浅草) here p.152-153.

民俗学を背景におこなわれる判定であり、いわば民俗法廷である。

たとえば、街の一隅の不動明王堂とそこでお参りしている若夫婦とも見える男女の後姿には、次の説明がほどこされている。

都市には数多くの神社仏閣が建立されており、人々の信仰の対象となっている。お不動さん、お稲荷さん、お地蔵さん等々、道傍の小祠に祀られている神仏は、「都市の不安」に応じている。それはまた都市生活者たちの「心なおし」のささやかな営みの一つなのであろう。

— 『〈心なおし〉はなぜ流行る 不安と幻想の民俗学』 p.6.

あるいはカプセル・ホテルの写真には次の解説がつけられる。

残業で家に帰れず、都心のカプセルホテルに泊まるサラリーマン。このカプセルにおさまると、仮寝する夢の中に、さまざまな幻想がよみがえるのだろう。漠然とした不安の漂う都市生活者たちの精神状況を生み出す生活環境が示されている。

— 『〈心なおし〉はなぜ流行る』 p.16.

さらに、団地のビルにはさまれたちよつとした広場での町内の祭りと思われる写真には次のキャプションがついている。

林立する高層ビルに住む人々が、心のやすらぎを求めて創出する民俗の一つに「都市の祭り」がある。神霊のこもる神社はすでになくすべてはセコ・ハンの儀礼であるが、ほんの一瞬でも、満足感が味わえるのだろう。マツリはハレの行事として、今後も続けられていくのである。

— 『〈心なおし〉はなぜ流行る』小学館 1993, p.212.

また『日本民俗文化大系 11』（「都市と民俗文化」）には、次のような数点が含まれる。

[路地とビル] 日本の伝統都市には、こうした風景がよく見られる。ぎっしり密集した「しもた屋」の路地裏、表通には10階建てのコンクリート造りのアパートが対照的にそびえている。路地裏のしもた屋には戦前から住んでいる古い住民たちが、表通のアパートにはたえず移動する仮住まいの住民たちが、生活を営み、ほとんど没交渉である。（台東区下谷）

— 『日本民俗文化大系 11』（「都市と民俗文化」） p.10.

[花見の場所とり] 農村では、3, 4月ごろ、山遊び、磯遊びなどの行事があった。これは近代になって、花見・潮干狩として定着しており、都会にあっても、恒例の行事となっている。山遊びは田の神迎え、磯遊びは襖袂みそぎはらえを基盤としているが、都市の花見は、花の名所に行つて、どんちゃん騒ぎする遊興のための行事である。写真は東京上野公園の花見客の姿である。

— 『日本民俗文化大系 11』 p.16.

[不思議な空間] 大都会にはしばしば不思議な空間が現出している。東京の千駄ヶ谷の一角、高速道路の上に寺院と墓地がある。死者は地下の世界に葬られているはずだが、地下は生者が動きまわる大都市空間なのである。都市の墓地にはつねに怨霊の発生が伴っていた。都市民の不安の反映と理解されたが、死者の憩う空間が、写真のように設定された場合、死者たちは何を訴えてくるのだろうか。

— 『日本民俗文化大系 11』 p.20.

[羽田空港の稲荷] 東京の羽田空港の駐車場に立っている鳥居は、旧羽田村の産土神うぶすなである穴守稲荷あなもりの鳥居である。昭和20年、空港拡張の際、穴守稲荷の本殿のほうは移転先に移されたが、この鳥居のほうは残ってしまった。伝承では、この鳥居を動かそうとすると、何かの事故が起こるといわれている。

— 『日本民俗文化大系 11』 p.33.

キャプションが詳しくなくてもシンボルとして選ばれたと思われる写真もある。

池袋で祈禱する若い女

— 『妖怪の民俗学 — 日本の見えない空間』(同時代ライブラリー) p.81.

交差点の交通事故

— 『妖怪の民俗学』(同時代ライブラリー) p.147.

これを見ると都会の〈不安〉をえぐり出すことにあくことなく精力そそがれているかのようである。都会の隙間にいとなまれるささやかな祭りは都市民の不安に対応するとともに所詮セコ・ハンである、という。タイムカプセルに眠る人は不安の悪夢にうなされる。高層のアパートは人付き合いを欠き、しもた屋は乱雑で、上野公園の花見はただの騒ぎにすぎない。高速道路をまたいで工夫された墓地ではその空中に浮いているが故に死者は憩うに憩い得ない。さらに若い女は、性的にも年齢的にも不安定であることによって伝統的な

怪異な心意の格好の餌食である。— これでは、都会、殊に現代の都会への呪詛と言わねばならない。それに対して辛うじて合格点をもらっているのは、農村とのつながりをたもつ歴史の古い宿場町である。

[宿場の町並み] 宿場は街道筋に細長くつづく町並みに一つの特徴が表れている。宿場の背後には農村がひかえており、農村と宿場は、密接な交流を保っていた。人々の往来も激しいもので、自然に市もでき、常店も設けられる。通行する旅人たちに土産物を売る商人も定着していく。宿場町の住民の心性は、日本の都市民の一つの特徴となっている。写真は木曾街道の奈良井宿。

— 『日本民俗文化大系 11』（「都市と民俗文化」）p.14.

これらを示されて思わず考えこんでしまうことの一つは、そもそも民俗学は価値判断を下すものなのであろうかという点である。しかもそこでなされるのは、過去に想定された理想、言うなれば理想的な農村国家としての日本を基準とした判定である。そしてこれまた柳田國男の時代認識にその原点があることは容易に推測し得るところである。宮田登の論説におけるそうした姿勢には筆者などは違和感がぬぐえず、延いては民俗学という専門分野のあり方への疑念すらもってしまうのである。

それは、宮田登が世相を描くにあたってとった視角がまったく誤っているということではない。むしろそれは当たっている面があると言ってもよい。それはこれまで指摘してきた幾つの特徴についてもそうである。辻や三叉路などを民俗空間と呼ぶのが適切かどうかはともかく、それらが危険な性格をおびることがあるのは事実であろう。それは、文明がいかにか発達しても、人間が背中に目をもった生きものではないという意味においてである。また都会生活に種々の不安がまつわるのも否定できない。〈土を離れた消費者心理〉やそれに類した言い方をされると、いかにも説得された感じを受けることあるのも事実である。児童の自閉症などには土にふれさせるセラピーがあり、正月と盆に郷里をめざす定期的な人波は、土への回帰といったものを感じさせる。だからこそ柳田國男にも宮田登にも説得性がみとめられるのであろう。そこには、何かしら胸を打つものすらある。しかしそうしたプラスの側面にこそ問題がひそんでいるのではなかろうか。

社会的提言の可否

その問題へ進む前に、もう一つ確かめておかななくてはならないことがある。宮田登の挙げた豊富な事例には刺激に富むものが少なくない。実際、宮田登によって民俗学の視野がひろがり、種々対象が姿をあらわす豊かな世界が形づくられたのは特筆すべきことであろう。なかには、話題への着目そのものが刺激となっているものの少なくない。たとえば『日本

民俗文化大系』のなかの一話である²¹。

『名ごりの夢』には、名家の出である桂川家にまつわる亡霊について次のような記事がある。先祖伝来の土地に立つ屋敷に伝わる柳の木があった。先代の頃、この木を伐り倒そうとすると、主人の夢枕に女が立ち、伐るのを思いとどませようとするが、蘭学者が迷信に惑わせられるかと、思い切って倒してしまった。ところがその晩、血だらけの女が現れて、「この怨みに七代まであなたの家に片輪を出しますぞ」と告げたという。それ以後桂川家には必ず一代に入らず不具者が出たという具体例をあげている。ところが明治七年、今泉みねの夫が築地に邸を買って移った。実家の父が訪ねてきたので何の気なしに庭へ案内すると、そこに柳の大きな古株があった。それを見つけた父は、ここは桂川の先祖が拝領した邸跡だと話した。亡霊の因縁ばなしが再現されたので、夫婦はあわててその邸から引っ越したという不思議な一件が聞書きされている。この土地では維新の折にも大勢の武士が切腹したという噂があり、その後も住み手のないまま、今は活版所になっているというのである。こうした例に限らず、怪異の生じたという伝説をもつ化物屋敷は、ほとんどが古い武家屋敷なのであり、城下町には類話が数多く語られている。かつて宮本常一はこした現象を、城下町の在に住んだ農民たちの武家観の表れてとみていたが、むしろこれは町に定着した武士たちの心意の一つの表現といえるかもしれない。

これについて感想を言えば、階級の差を素地にした社会心理と関係づけた宮本常一の見解が説得的でもあり穏当でもあるように思われる。支配者たる武士階級へのそれ以外の階級の者の複雑な思いがさまざまな表現をとる蓋然性が高いからである。もちろんそれは武家だけが対象ではないであろう。同じ階級・階層であっても、栄えている家は羨望や妬みの的であろうし、富家の没落には溜飲を下げるような隠微な満足感がはたらくであろう。いずれも正面切った表現がはばかれ、しかも多数者の共通心理となれば、風評やさらに怪異譚のかたちをとる可能性は高いであろう。

しかし別の脈絡も考えられる。上の一切に続いて次のような、これまた刺激に富んだエピソードが取られている。

泉鏡花は、とくに金沢や江戸の武家屋敷にまつわる怪異話を多く素材にとり上げている。その中の小品の一つ「怪談女の輪」は、金沢の一角、江戸時代以来の古屋敷が、明治になって英漢数学塾となり、そこに塾生となって住み込みの中の若者の体験談である。

21 宮田登「都市と民俗文化」『日本民俗文化大系 11 都市と田舎 — マチの生活文化 —』小学館 昭和 60, p.5-42. [武家屋敷の怪異譚] p.35-39.

「黄昏の頃、之を逢魔が時」に、突然霰のように礫が屋根を打ちだし、やがて部屋の特定の空間に「蒼白い女の脚」ばかりが歩くのを見る。さらに一室に二〇人あまりの女たちがぐると輪になってすわっていたという。この怪異の因縁は、この屋敷のある界限が「封建の頃極めて風の悪い士町」で妙齡の女性がここへ連れ込まれたり、腰元妾奉公に入った者で生きて帰った例がない場所だといわれていた。女の亡霊がこの士町にとどまっており、怪異を示す化物屋敷を発現させていることになる。

これだけ切り離されると、脈絡の特定は難しいが これまた全体として見ると支配者を構成する武士階級のなかに起きた歪みや、あるいはその階級への他の階級のねじれた思いがこめられているのかも知れない。同時にまったく別の種類の可能性も考えられる。それは教養や学問にまつわる怪異譚である。学問や高度技術はしばしばそれ自体が魔法として、またそれを操る者は魔法使いのように見られることがあるのは西洋にもその例がある。先に引いた活版印刷所もそれに重なるところがあるが、印刷所に幽霊が出るという話種は書物が一般の水準をこえた高度知識の媒介であるがゆえに起きたもので、近代前期の西洋にはその例が少なくない。同じく〈牧師館の幽霊〉もあり、日頃、一般の者を超越する知識をもつために程度の差はあれ仰ぐみるべき存在への複雑な差異の感情を盛っている。ここでは、没落した武家屋敷であることと、それが英漢数学塾となっていることの二つの条件がみられ、そのいずれに比重が存するかは判然としないが、そうした社会的な差異の意識が怪異譚の生成をうながしたと考えることもできる。そう断言できるわけではないが、宮田登がこの話類についてあたえる空間の霊性よりも、それが自然な理解ではなからうか。実は、宮田登は、ここに挙げた話類を主に次のように説明するのである²²。

……都市の場所性を考えてみる必要がある。これは都市空間の一定の場所で生活しているということの意味である。前出の化物屋敷にしても、その家に伴う凶事が契機となって、亡霊がその空間に滞留した状態で、生きている人間に祟っていると説明されているのである。

場所性には、地形が大きな影響を与えている。谷や坂、川や台地の微地形、すなわち、人間の観察の範囲には十分入るが、普通の地形図では十分表現されない程度の地形には、場所が固有にもつ力が秘められているという考え方は、建築学や都市計画の中に活かされている。とりわけ土地霊というような土地に潜む「気」の存在を重視する立場もある。このことは建築儀礼をみると明らかで、建築にあたって最初の地鎮祭だけは欠かすことはできない。土地霊が建築する土地を支配しているという潜在意識にもとづくことは明

22 「都市と民俗文化」『日本民俗文化大系 11』、[武家屋敷の怪異譚] p.37-39. (*)若月幸敏「微地形と場所性」榎文彦(他著)『見えがくれする都市』鹿島出版会 1980, pp.91-137.

らかである。ということは、「都市全体から一つの町、そして一区画の敷地に到るまでさまざまな土地神が存在し、それに基づいて都市空間が序列を与えられていた」(*)という理解に至るのである。この状況が景観として表面化しているのが、境の空間にあたる坂や辻、橋の周辺に祀られる小祠、産土神^{うぶすな}として祀られる町の鎮守神、墓地に接する寺院などの配置なのである。

またこれらのエピソードについて次のような総論的な評価が下される²³。

場所に伴う土地霊が「隠れた空間」から発現している証拠でもあろう。

先にもふれたが、古い霊力の記憶が土地に滞留し、都市化のなかで改めて力をもつというのが果たして説得的かどうかは疑問と言わなければならない。同時に、辻や三叉路や川や橋といった地勢や地形、あるいは施設であっても一般的な性格のものへの依拠が論の性格を左右していることには注目しなければならない。つまりそれらに決定的な意味をもたせることが、議論から歴史性を失わせているからである。あるいは、少なくとも江戸後期も現代もひとしく論じることができるために、そこに比重がおかれたのかも知れない。その卵と鶏の先後はともかく、江戸時代も現代も同じ論理で説明され、また説明できるのは、論説が静止した構図にあることを意味していよう。たしかに現代のめまぐるしい世相のなかのショッキングな事例がふんだんにとりいれられ、それらのエピソードはアクティブな要素をもっている。しかし同時にそれらは江戸時代に発現した事例とも同じ性格のものとして説明されるのである。アクティブな性格の諸事例がもつ効果はともかく、説明の仕方は、どこを切っても同じ断面を見せている。それはつまりところ柳田國男の説いた都市に不可避とされる〈不安〉の論である。その着想が衣鉢の継承者によってここまで展開力を発揮したことに凄さを見るか、正体を垣間見て白けるかは、受けとめ手それぞれに反応があろう。とまれ、〈不安〉が切り拓いた地平と障壁に着目したのである。

23 「都市と民俗文化」『日本民俗文化大系 11』, [武家屋敷の怪異譚] p. 39.